もうひとつのチベットとそこから見た「チベット問題」

奈良　雅史

川田進著
東チベットの宗教空間
中国共産党の宗教政策と社会変容

A5判　478頁
北海道大学出版会
［本体6500円＋税］

二〇〇八年の「チベット騒乱」、二〇〇九年以降の百数十名に及ぶチベット人による焼身抗議。これらは日本国内のメディアでも広く取り上げられ、「チベット問題」の深刻さが改めて広く知られることとなった。そこで「チベット問題」は、信教の自由や民族自治を制限する中国共産党とそれに抵抗するダライ・ラマを中心としたチベット亡命政府、あるいは無神論者でマジョリティの漢族とチベット仏教を信仰するマイノリティのチベット人との対立関係に端を発するものと紹介される傾向にある。しかし、序章において「筆者が本書で最も訴えたいことは、東チベットにおける宗教信仰の現場には、両者（中国共産党とチベット亡命政府）のプロパガンダと相容れない状況も存在していることである」（四頁、丸括弧内は評者）と宣言されるように、本書が明らかにするのは、「チベット問題」がこうした単純な二分法的図式に還元しえるものではないということである。本書は、現地で収集した内部資料を含む文献調査、および外国人による実施が困難な聞き取りや参与観察を中心とした現地調査に基づき、「チベット問題」を立体的に描き出すことで、そのことを実証的に明らかにしている。その際、焦点を当てられるのが、本書のタイトルにもある「東チベット」である。

東チベットは一義的にラサを中心とするチベット高原東部に位置する四川省・青海省・甘粛省・雲南省に跨る地域を指す。しかし、ここには地理的空間以上の意味が含まれている。それが本書において「チベット問題」を上記の対立的図式に還元せずに対象化する上での鍵となっている。本書で描き出される東チベットは、まずチベット亡命政府と中国共産党の間

という政治的インターフェースである。また、「組織力が弱く、中国共産党への抵抗の姿勢を示さない」（二一八頁）ニンマ派が大きな影響力を持つという意味で、ダライ・ラマ一四世が所属する戒律重視のゲルク派とマルクス主義の中国共産党を架橋する宗教的インターフェースでもあるといえる。さらに、ニンマ派を中心とした宗教組織が漢人教徒を積極的に受け入れてきたことを踏まえると、チベット人と漢人との間の民族的インターフェースにも位置づけられる。「チベット問題」にアプローチする上で、このように多義的な位置づけにある東チベットに焦点を当てたのは筆者の慧眼であったといえるだろう。

本書は、全体の問題関心および調査方法などを提示した序章、第一章から第九章までの本論部分、全体を総括した終章から成る。以下、本書の概要を簡単に要約したい。

序章では、上述の問題関心を踏まえ、「多くの漢人信徒を獲得し多層化し始めた東チベットの宗教空間を、中国共産党の宗教政策という視点から読み解きその特質を浮き彫りにすることが本書の目的」（四頁）として提示される。この目的に則り、第一章「中国共産党の宗教政策」では、本書全体をつらぬく中国共産党の宗教政策について論じられる。本章では、先行研究において曖昧にされがちであった中国共産党の宗教政策と中国政府の宗教管理を明確に区別した上で、各指導者の下での中国共産党の宗教政策およびチベット政策の変遷が提示される。

第二章から第四章にかけては中国共産党とチベット仏教の必ずしも対立的ではない関係が明らかにされる。第二章「「愛国活仏」ゲダ五世の虚実と軍の宗教政策」では、ゲルク派の化身ラマ・ゲダ五世に焦点が当てられる。彼は長征時期に紅軍への支援活動を行い、中国共産党のチベット解放政策においてダライ・ラマ一四世を説得する使者として派遣された。ここでは、中国共産党の宗教政策の変遷のなかで、ゲダ五世の「愛国的宗教指導者像」（二一八頁）がいかに作り上げられてきたのかが明らかにされる。第三章「民主改革・文化大革命時期のデルゲ印経院」では、チベット仏教徒の聖地であり、経典などの刻板と印刷を行うと共に、各種刻木を保管するデルゲ印経院が事例として取り上げられる。ここでは中国共産党によるチベット政策を有利に進める上で重要な役割を果たしたとされるチベット人幹部たちの奔走により、デルゲ印経院が中華人民共和国成立後の政治的動乱による致命的な被害を回避しえたことが明らかにされる。続く第四章「文化大革命後のデルゲ印経院と統一戦線活動」では、文化大革命終結後のデルゲ印経院の活動再開が鄧小平時期のチベット政策と

の関連から論じられる。そこで明らかにされるのは、「印経院の復活は地元の自助努力や文化政策によるものではなく、亡命政府に対する政治と宗教政策の宣伝活動、つまり愛国的統一戦線活動がもたらした」（一八九―一九〇頁）ことである。以上のように、東チベットにおけるチベット仏教は中国共産党によって政治的に利用されながらも、体制に取り込まれることで徹底的な破壊を免れえたといえる。

第五章と第六章では、二つのチベット仏教の宗教組織が取り上げられる。そこで明らかにされるのは、寺院の活動・運営に対して抑圧的な中国共産党の宗教政策が宗教組織を活発化させるという逆説的プロセスである。改革開放以降、青年僧のインド流出を背景に、四川省甘孜チベット族自治州では、当局の認可を受けて相次いでチベット仏教の教育機関が開設された。第五章「ラルン五明仏学院粛正事件」では、その一つであるラルン五明仏学院が取り上げられる。本章では、当該仏学院が強い影響力を持つニンマ派の高僧により設立され、その指導下で一万人を超す出家者と信徒を擁する巨大な宗教組織へと発展し、中国当局による弾圧を受けるに至るプロセスが明らかにされる。特筆すべきは、当局が寺院にその経済力に応じた定員を課したことが、当該仏学院の発展の一因となったことである。運営資金に乏しい小規模寺院では限られた数の僧尼しか受け入れられず、所属先を確保できない僧尼がラルン五明仏学院に集まったのである。当該仏学院は、定員が課せられる寺院ではなく、宗教教育機関であるため、それが可能になったとされる。また、第六章「ヤチェン修行地の支配構造と宗教ＮＧＯ」で取り上げられるヤチェン修行地も同様の背景から一万人を超えるとされる僧尼を集めるに至った。ヤチェン修行地もラルン五明仏学院と同様に寺院ではなく、定員制が課せられない修行地であるため、多くの僧尼の受け入れが可能になったとされる。

これら二つの宗教組織は共にニンマ派の宗教指導者により設立されたため、ニンマ派をその教義の中心とする。しかし、一六世紀以降、東チベットに広く伝播した超宗派的な交流を志向するリメ運動の流れを受け、これらの宗教組織では宗派に囚われず、比較的自由な学問と修行が行われてきたとされる。そのため、これらの宗教組織にはチベット仏教各宗派の僧尼が集まってきたという。さらに、こうした開放性は宗派横断的な交流だけでなく、民族横断的な交流をも可能にしてきた。多くの漢人信徒がこれらの宗教組織に集まるようになったのである。第七章「漢人・華人信徒の信仰とスピリチュアリティ」が焦点を当てるのは、こうした漢人信徒の宗教意識である。ここでは、漢人信徒が教義解釈を学ぶグループと

瞑想や坐禅を通してスピリチュアリティを探求するグループから成ることが明らかにされる。第五章と第六章と同様、特筆すべきは、当局は漢人信徒の増加を警戒し、引き締め政策を実施する一方で、漢人信徒の増加の一因が中国共産党の宗教政策にあるということである。鄧小平および江沢民時期の宗教政策において、宗教組織の経済的自立が呼びかけられた。結果、チベット仏教の高僧が漢人信徒からの布施獲得を目的に漢人居住地区での弘法活動を活発化させ、それが漢人信徒の獲得につながったとされる。

続く第八章「ラルン五明仏学院の震災救援と宗教の公益活動」では、和諧社会を目指す胡錦濤政権下の宗教政策が、当局が警戒するチベット人と漢人をつなぐネットワークの形成を可能にした要因の一つであることが明らかにされる。「胡錦濤時期の宗教政策の特徴は、宗教を鳥籠の中に閉じ込め管理するだけではなく、多くの国民が格差に悩み不安を抱える現在の社会に宗教組織が関わることで利他の精神を発揮させたこと」（三二五―三二六頁）だとされ、宗教組織による社会貢献が促進される。こうした政策の変化を背景に、二〇一〇年四月の青海省玉樹チベット族自治州における震災の際、ラルン五明仏学院が組織した救援隊の活動は、当局に積極的に受け入れられたという。注目すべきは、言語の相違などで仏学院内では親密な交流が行われてこなかったチベット人と漢人との間にネットワークが形成されたことである。これは一時的なものであったとされるが、筆者はそこに中国における宗教的ソーシャル・キャピタルの可能性をみている。

第九章「「二〇〇八年チベット騒乱」の構造と東チベットの動向」では、冒頭で言及した二〇〇八年の「チベット騒乱」とその後の焼身抗議が東チベットの視点から論じられる。先行研究において、「二〇〇八年チベット騒乱」はラサで発生し、周縁部に波及したとみなされる傾向にあった。しかし、それに対して本章で筆者は、「二〇〇八年チベット騒乱」が、一九五九年「チベット民族蜂起」四九周年を契機とする「二〇〇八年ラサ騒乱」と、それより以前の二月二一日に青海省で発生した僧侶や民衆と公安当局との衝突事件に端を発する「二〇〇八年東チベット騒乱」という二つのプロセスからなると論じる。そのうえで、東チベットに特に集中している二〇〇九年以降の焼身抗議が後者の流れに位置づけられると論じられる。また、これらの抗議活動に伴い、公安や武装警察による宗教組織への管理が強化され、それがチベット人社会の閉塞感を一層深めているという。しかし、ラルン五明仏学院やヤチェン修行地では焼身抗議が起こっておらず、ニンマ派高僧による弘法活動が政府により認められていることは注目に値する。

本書が明らかにしたように、これらの宗教組織が超党派的な特徴を持つとすれば、管理統制が強化されたゲルク派を含め、チベット仏教が「共産党の宗教政策の隙間を衝いて発展」（二七五頁）しうる余地が残されているといえるかもしれない。

以上のように、本書は東チベットに焦点を当て、中国共産党の宗教政策との関連から「チベット問題」を通時的、共時的に分析した好著である。上述のように、中国共産党の宗教政策とチベット仏教の発展の共犯的な関係や中国当局による管理統制の強化が逆説的にチベット仏教の発展を促すプロセスなど、本書は示唆的な考察に溢れている。その意味で、本書は序章で述べられるように「地域の固有性のみを強調した東チベット地域研究ではなく（中略）中国地域研究」（三頁）であり、中国における他の少数民族や宗教に関する研究に対しても有用な視座を与えてくれるだろう。

しかし、示唆に富む考察だけに、「中国地域研究」に留まらず、従来の社会学や人類学における国家／社会関係、抵抗論、権力論などの理論的枠組みを批判的に検討することもできたのではないかと思われる。また、本書における重要な研究対象の一つである漢人信徒については多声的にその宗教的なあり方が描き出される一方で、チベット人仏教徒の宗教的なあり方に関してはあまり論じられていないように思われる。しかし、本書において筆者が二〇年以上に渡る困難な調査の成果を踏まえ、東チベットから「チベット問題」を捉え直したことには、上述した学問的な意義だけではなく、今後の「チベット問題」を考えるうえでも大きな意義があるといえる。

（なら・まさし　北海道大学）

中島利郎 著
台湾の児童文学と日本人
日本統治期台湾文学研究
日本が台湾を統治した時期に児童文学界で活躍した四人の日本人作家を論述。初の児童文学者である西岡英夫を詳述する章、書下ろしの西川満と児童文学・日高紅椿覚え書の両章。再論を含むまど・みちお論の四章で構成。各作家に年譜ふうの著作目録を付す。　4800円

台湾郷土文学選集　全5巻完結
Ⅰ永遠のルピナス（魯冰花）　中島利郎訳　2000円
鍾肇政著
Ⅱ怒濤　澤井律之訳　2700円
鍾肇政著
Ⅲたばこ小屋・故郷　鍾理和中短篇集　野間信幸訳　2300円
Ⅳシラヤ族の末裔・潘銀花　葉石濤短篇集　中島利郎訳　2300円
Ⅴ曠野にひとり　李喬短篇集　三木直大・明田川聡士訳　2300円

好評既刊書から
中島利郎著　日本人作家の系譜　日本統治期台湾文学研究　5500円
若林正丈編　現代台湾政治を読み解く　4000円
松永正義著　台湾文学のおもしろさ　2800円
中島・河原・下村編　台湾近現代文学史　8000円
＊表示はすべて本体価格です

研文出版〈税別〉
東京・神田神保町2-7　☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/